

平成18年度年次晩餐会 初めての地方開催

元気いっぱいいのナゴヤで開く



歓迎の挨拶をする和田豊司東海支部長

■全国から435人が参加

平成18年度の年次晩餐会が12月2日、東海支部の主管で名古屋市の「ウエスティン ナゴヤ キャッスル」で開かれた。日本山岳会の年次晩餐会が東京以外で開催されたのはこれが初めて。435人の会員が参加した。いま東海が元気だという。日本経済をリードし、日本山岳会のなかでは東海支部が元気なのである。

■アルペンホルンに誘われて

アルペンホルンの演奏に誘われ

て会場に入った。例によってテールブルがずらりと並び、それぞれに山名が付けられているが、錫杖ヶ岳、宇連山、古町高山、白猪山……といつもと違う。東海の山々である。開催地を意識せざるを得ない。アルペンホルンは長野・大桑村のひとたちの演奏。

昨年亡くなられた会員に対する黙祷で晩餐会は始まった。村山雅美、今井喜美子、大井正一の各名誉会員ら62人が亡くなられた。改めてご冥福をお祈りしたい。

黙祷を終えると、オーケストラが入場してきた。会場いっぱい元気な音楽が鳴り響いた。東海学園交響楽団だそうだ。中学・高校生で構成され、総勢50人。曲は雪山賛歌、そしてブラームス。

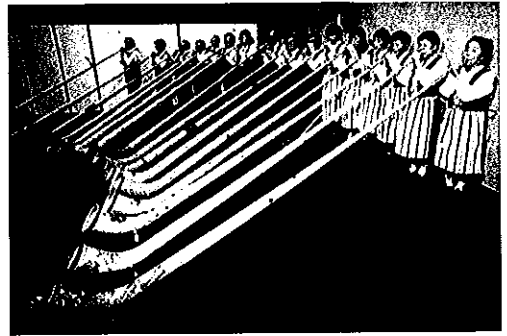
■会長あいさつ

支部の活性化を図る

冒頭、平山善吉会長は、あらまし次のように挨拶した。

一、今年には東京を離れて名古屋で開くこととした。いつもとは違ったメンバーの参加を得ることと支部の活性化を図る狙いだ。今日まで準備してきた東海支部に厚く礼を言いたい。

一、一昨年は日本山岳会創立100周年を迎え、みなさんのご支援、ご協力をいただいた。記念事業はおおかた終了したが、06年に入つて英文ジャーナルの刊行、学生部による海外遠征などが続いている。11月には中央分水嶺踏査の残った2区間を踏査し、北海道・宗谷岬から九州・佐多岬まで約5500キロを線で結ぶことができた。『百年史』の刊行も07年には印刷に出せ



アルペンホルンに誘導されて入場(大桑アルプホルンクラブ)

る段階となった。

一、会の現状を報告したい。20歳代の会員は32人で0・5割。100歳を超える会員は3人で高齢化が進んでいる。会員の減少傾向が続いており、06年は1000人の減少となった。会員総数は5768人だ。会員の平均年齢は64歳となった。

一、次の100年に向かって日本山岳会がいかにあるべきかを検討してきた。できることから実行していくというところで、役員定数を低減、執行機関と諮問機関を分離した。加えて定款の改正を行い、11月に文部科学大臣の認可を得た。社団法人から公益社団法人

への移行を視野に入れ、準備・検討を進めている。

一、支部活動への支援・協力を行ないたい。支部長会議を支部持ち回りで開催。首都圏には、いくつかの支部が発足する見込みとなった。また委員会の後継者の育成と委員の公募を行なう。山岳保険の見直しなど会員に対するサービスの平等化を行なっていきたいと思っている。春から第三土曜日に開く土曜懇和会に役員が交代で出席し、幅広く意見交換する場をつくりたい。若い人たちの自発的な登山を支援、早い機会に偵察隊を派遣できるようにしたい。

■和田東海支部長あいさつ 4つの目標掲げて活動

東海支部を代表して和田豊司支部長が歓迎の挨拶をした。

「1961年に5人で発足した。以来、276人の会員をかかえるまでになった。ほかに支部友会員として261人いる。4つの目標を掲げて活動している。第1は、より高く困難を求めて登ること、第2は登山を広げること、第3は自然環境の保護、第4はボランティア活動だ。具体的には、ローツエ南壁への冬季初登攀、未組織登

山者に対する登山教室の開催、猿投の森づくりなど、これらの目標に沿って活動している」

続いて来賓を代表して加藤幹敏中日新聞編集局長が挨拶。

次に、新名誉会員が紹介された。新名誉会員は、松田雄一元副会長とハリッシュ・カパディア氏。松田会員はマナスル登山をはじめ日本山岳会の海外登山隊の派遣に対して積極的に貢献をされた。カパディア氏は長年にわたってヒマラヤンジャーナルの編集長として活躍、英国山岳会、アメリカカ山岳会の名誉会員となっている。

松田新名誉会員は「名誉会員は日本山岳会が創立されたときから



オーケストラの生演奏(東海学園交響楽団)

存在し、ウェストンが第1号。私は125号となる。マナスル登頂以来50年を超えた。今後も会のために役立ちたい」と語った。

■永年会員の紹介

新永年会員が発表された。連続して50年会員だった会員である。入会は1956年度。この年の5月9日、日本山岳会がマナスルに初登頂した。新永年会員は34人。

熊谷松雄(4350)、中村一雄(4352)、北島正八(4354)、井口謙司(4357)、西牧康(4360)、寺田鬼久磨(4364)、西川益生(4365)、神原達(4366)、新井信太郎(4367)、熊谷とも子(4371)、橋本祥案(4375)、池田経昭(4376)、荒木昭(4382)、遠山博明(4395)、國分恒司郎(4408)、西沢健一(4427)、芳野起夫(4428)、落合晃明(4430)、横山厚夫(4432)、近藤信行(4433)、平山善吉(4440)、竹島正義(4448)、鳥居鉄也(4449)、中島伊平(4460)、藤井信(4468)、相模八郎(4474)、山口節子(4475)、竹内満雄(4480)、塚本珪一(4

482)、樋口清明(4483)、三木亮(4486)、山口徳明(4488)、芳野菊子(4494)、今成幸夫(4495)

■秩父宮記念山岳賞

第8回秩父宮記念山岳賞は山本紀夫会員の「アンデス・ヒマラヤにおける高地民族の山岳人類学的研究」と決まった。表彰式が行なわれた。山本会員は「この賞は、元会長を歴任された今西錦司氏が一番貰いたくて、取れなかった賞ではないかと思う。文化勲章をも受章した人を差し置いて、後輩の私が頂いたことに大きな責任を感じている」と語った(4ページに報告)。

■中央分水嶺踏査に感謝状



平山会長より永年会員章の授与

中央分水嶺踏査事業の参加者は延べ1500人にのぼった。参加した人たちの労をねぎらい感謝状を贈ることとした。新妻徹・北海道支部長が参加者を代表して感謝状を受け取った。

塚本圭一 新永年会員の音頭で乾杯し、会食にはいった。塚本会員は「いま日本に必要なのは風土の再生だ。山を愛し自然のなかを歩いて得てきたものを子どもたちに伝えていこう」と語った。

■ローツェから現地中継

7時10分、会場が突然暗くなつた。スクリーンに映像が映し出された。東海支部が派遣しているローツェからの現地中継。千田隊員からの報告だ。現地はまだ明るい。標高7100mでルート工作中だという。砂嵐が吹き荒れているらしく音声に雑音が混じる。和田支部長、平山会長が呼びかけた。会場に激励の拍手が巻き起こった。「ありがとう」という答えが返ってきた。現地に通じたようだ。3度目の挑戦だ。成功を祈りたい。

会食をはさんで、各支部からの出席者、また新入会員の紹介があった。東海支部がもつとも多く113人。次いで岐阜35人、関西25



ローツェBCとの交信(現地中継は千田隊員)

人、京都20人と続く。最後に首都圏も紹介された。新入会員は121人、うち25人が参加した。

■遠征報告と記念講演

午後2時30分から学生部のヒマラヤ遠征報告などがあった。学生部は昨年9月、ネパール・マナスル山群の未踏峰パンバリ・ヒマール(6887m)に初登頂した。加藤好美隊長と中島隊員が報告。

続いて、第8回秩父宮記念山岳賞を受賞した山本紀夫会員による記念講演があった。山本会員はアンデスなどでのフィールドワークを紹介、アンデスやヒマラヤなどの高地ではジャガイモを主食とする共通点のあること、これらの地

域にかつて高地文明が栄えていたことなどを紹介した。

■ナゴヤが東海支部が元氣

講演会の最後に東海支部の紹介があった。「いまナゴヤが、東海支部が元氣。その秘密を明かす」と題して、尾上昇会員が講師になつて講演を演じた。

鳴り物入りで登場した尾上講師は、ヒマラヤに憧れて支部を創設したこと、1966年のアコンカグアから始まってマカルー、K2などに登頂、いま冬季ローツェ南壁に挑戦していること、そして元氣の秘密は「ヒト、モノ、カネ」に恵まれていること、地の利のあることなどと解き明かしてくれた。グッズコーナーでの最大の出し物は金のピッケル。名古屋城の金のシャチホコにちなんで記念販売された。東海支部の梶田会員の製作によるもの。注目を集め、たちまち1本販売したという。

■猿投の森・御在所山で懇親山行
翌日の懇親山行は東海支部が活動を続けている猿投の森と鈴鹿・御在所山で行なわれた(5ページに報告)。

(文)高橋重之、写真||松波幹夫、奈良千佐子